

知的障害のあるめいの優しさを35年撮り続けた映画監督、伊勢真一さん



作りたいドキュメンタリー映画を作り、上映したい人を募って見てもらう自主製作・自主上映にこだわってきた。

今秋から公開された最新作「やさしくなあれ」は、てんかんと知的障害があるめい西村奈緒さん(44)とその家族の日常を追った作品だ。

一家のアルバム代わりにと、8歳から撮り始めた。成人式までを「奈緒ちゃん(1996年)、作業所での活動は「びべれっと」(2002年)、グループホームでの自立は「ありがとつ」(06年)という作品にまとめ、今回は今年正月まで35年間撮りためた長時間以上の映像を編集した。

もっとゆっくり生きませんか

題名は言い争う両親にかけた「けんかしちやいけないうよ、やさしくなあれ……」って言わなぐちゃ」という奈緒さんの言葉から取った。

彼女の変わらない優しさ、素直さがゆったりと描かれている。

「世の中のテンポが速過ぎる。もっとゆっくり生きませんか、と思う。奈緒ちゃんたちを見て、自分事として35年を振り返り、考えたら」

映画監督だった父の葬儀でスタッフに誘われ、映像の世界へ。架橋工事の記録映画やカラオケの背景、企業PR映像などを片っ端から編集し「習うより慣れろ」だった。

監督作品には、小児がんの治療や認知症、東日本大震災の被災地、山小屋などをテーマにしたものもある。次回作は寝たきりの友人を撮った「えんとつ」(1999年)の続編。「言葉と違い、映像には見る側が考えてしまう、あいまがある。そこを大事にしたい」。東京都出身。68歳。

落語、面白かったよ

下関南総合支援学校で「えのうら一座」披露

下関市幡生町の下関南総合支援学校(大野浩光校長、83人)の児童、生徒たちが12日、同校で落語と小ばなしを楽しんだ。

同市彦島江の浦町の障害者福祉サービスマス事業所「えのうら福祉工房」の首藤憲二所長(55)と同事業所の利用者でつくる「えのうら一座」の5人が出演。ステージで大げさな身ぶり手ぶりを交えて落語と小ばなしを披露すると、大きな笑い声が響いた。

日本の伝統芸能の落語を観賞することで子どもたちの表現力や想像力を育もうと同校が初めて企画。地域の人たちも含め約150人が観賞した。生徒会長で高等部普通科3年の今井生治さん(17)は「落語は初めて見たけど、声や表情を変えながら話しているので面白かった。また聞いてみたい」と話した。

同一座は落語好きの首藤所長が事業所を利用する人たちの要望を受け3年前に結成。公民館や地域のイベント、デイサービス施設などで落語を披露するなど市内を中心に活動。昨年度は北九州芸術劇場で行われた落語会にも出演した。首藤所長は「同じように障害がある人が頑張っている姿を見て『自分たちにもいえることがある』と前向きな気持ちを持ってほしい」と話した。



児童、生徒たちに落語を披露する「えのうら一座」の首藤憲二さん=12日、下関市

児童、生徒たちに落語を披露する「えのうら一座」の首藤憲二さん=12日、下関市